

## ■ 作品について

長谷川 潔 〔はせがわ・きよし、1891年(明治24年)–1980年(昭和55年)〕

《草花とアカリヨム》

1969年(昭和44年) メゾチント 26.4×35.6cm 横浜美術館蔵

1918(大正7)年、27歳で海を渡った長谷川潔は、フランスで当時忘れられていた17世紀に発明された銅版画技法「マニエール・ノワール」に出会いました。マニエール・ノワールは、フランス語で「黒の技法」を意味し、英語ではメゾチントと呼ばれます。その黒の美しさに惹かれた長谷川は、独自に研究してその再興に取り組み、1959(昭和34)年以降は技法をさらに進化させ、静謐さをたたえるピロードのような深い黒の画面による静物画を制作しました。

本作に描かれた「アカリヨム」とはフランス語で水槽のことで、長谷川が好んだモチーフです。まるで時間が止まったような不思議な感覚を見る者に与える漆黒の背景や、水槽を浮遊する3匹の魚、まっすぐにこちらを向いた愛らしい草花と花瓶、その影の落ちたテーブルなど、すべてが黒によるモノトーンの豊かな階調で描き出されています。

## ■ マニエール・ノワール(メゾチント)について

銅版画は、版上に刻んだ線や点にインクを詰め、紙に刷り取る凹版による版画です。色面や階調は、線もしくは点を集めることによって表現します。凹版が深ければインクが多く保持され階調が濃くなり、凹版が浅くなるにしたがって明るくなります。

マニエール・ノワールは、最初にベルソーと呼ばれる道具で銅版の上に細かな点を規則正しく無数に刻み下地をつくります。ベルソーは細かな刃がたくさ付いた刃物で、刃のある湾曲した部分を版の上で揺りかごの様に揺することで銅版上に細かな点が連続して刻まれます。縦横なめ何回も何回もベルソーを移動しながら揺らしていくことで銅版全体がギザギザに目立てされます。この状態で銅版全体を覆う無数の凹みにインクを詰めて紙に刷ると真っ黒になる下地が出来上がります。次にスクレーパーと呼ばれる刃物でこのギザギザを削り取りながら明部にかけて階調をつけていきます。黒の中に明るい部分を浮かび上がらせていく、闇に光を与えていくような技法で、ベルソーによって目立てされた版から生まれるピロードのような深い黒と微細な階調が特徴となっています。



(横浜美術館 教育普及グループ)